



Kernel通信

神戸大学附属図書館 電子図書館担当

(Issue Date)

2023-01-24

(Resource Type)

other

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100478238>





研究者紹介 有澤知世先生

本コーナーでは、学内の研究者の方にインタビューを行い、普段の研究内容やその方法、附属図書館への要望等についてご紹介しています。今回は人文学研究科の有澤知世先生にお話を伺いました。

Kernel を含む本学デジタルアーカイブコレクションの中に、「貴重書・特殊コレクション」[1]があります。本学で所蔵している貴重書の一部は歴史的典籍 NW 事業[2]によってデジタル化されており、今回はその事業に関わられている人文学研究科の有澤知世先生にお話を伺いました。

有澤先生のご専門は日本近世文学で、特に戯作者山東京伝を中心に、18 世紀から 19 世紀初頭にかけての俗文芸について研究されています。本インタビューでは、国文学を専攻し山東京伝を研究対象にされた理由や、アカデミアの道に進むことに決めた理由などを詳しくお聞きしました。



先生の研究には、戯作の構造分析、考証、そして考証と戯作の関係という大きく 3 つの柱があり、それらを研究することが、山東京伝の作品を理解し多層的な遊びを読み解いていくうえで重要であるとお話いただいたことが印象に残りました。さらに戯作の読み方、おもしろさについても、わかりやすく説明していただきました。

また以前に国文学研究資料館で初代古典インタプリタとして古典籍や研究者とクリエイターとの橋渡しをされていた経験から、その時に感じた古典籍とクリエイターを繋ぐことの難しさ、対話を大事にしたいという気づきがあったこと、根本にある国文学を研究する意義についての思いなどを語ってくださいました。

このほかにも、図書館やデジタルコンテンツの使用について、資料を使用するとき心がけていること、自身を振り返って学生さんたちへ伝えたいメッセージなどもお話ししていただきました。

ぜひインタビュー全文をご覧ください。

[1] 貴重書・特殊コレクション. <https://da.lib.kobe-u.ac.jp/da/sc/>

[2] 正式名称は「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」。国文学研究資料館が中心となって実施されている、日本語で作成された古典籍の撮影・画像公開を行い、その画像を用いて国際的な共同研究のネットワークを構築する事業。本学も拠点大学として本事業に参加している。

特集： 学術流通に関する図書の紹介

本特集では、近年刊行された学術流通に関する図書を紹介します。いずれの図書も図書館に所蔵がありますので、興味を持たれた方はぜひ手に取ってみてください。

ビッグデータ・リトルデータ・ノーデータ：研究データと知識インフラ

クリスティン L.ボークマン著；佐藤義則，小山憲司訳

勁草書房，2017.9

OPAC リンク：https://op.lib.kobe-u.ac.jp/opac/opac_link/bibid/2002209806

本学でも「研究データ管理・公開ポリシー」が策定され、研究データの公開が積極的に行われようとしているところですが、本書は研究データの公開や研究データ自体に関して、様々な方向から検討が加えられた書籍です。タイトルとして挙げられている言葉は、天文学や実験物理学などのように多数の研究者により大規模に行われた研究の成果が、定まった規格でオープンにされる「ビッグデータ」、人文科学に典型的な、研究者が独自に研究を行い、公開は限定的で必ずしも十分なメタデータが付与されていない「リトルデータ」、世の中に全く存在しない、あるいはデータが非公開のため、利用不可能な「ノーデータ」の3種類のデータを意味しています。



本書では、研究データに関して、6つの挑発的課題をまず提示し、様々な学問分野でその課題に対する検討がなされています。1、データの再現性・再利用はいかにして可能か。2、文脈や時間を越えた知識の移転が可能か。3、学術におけるデータの公開が、多様な利害関係者に益するものとなるか。4、学術成果のオープン化が研究者や大学等にいかに関与を与えるか。5、学術基盤が学術成果のオープン化により、いかに影響を受けるか。6、学問的体系は研究者の世代を超えて発展するが、研究資金提供はごく短い期間で行われる状況の中で、長期的視野に立って学問の発展を考えられるか。

上記の課題を、自然科学、社会科学、人文科学の3つの学問分野ごとに、さらにその中で典型的な領域をそれぞれ2つずつ取り上げ、検討を加えています。

原著は2015年に英語で出版された書籍ですので、その年までの状況に対する考察になりますが、現在でも有効な課題を提示しています。本書の最終章で、「何をどんな理由により保持するか」について述べられていますが、現時点でそれに完全に答えることはできません。将来、どんなデータが有益となるかは分からないとしか言いようがありません。学術研究のデータについて、発見可能で利用可能な仕組みを作ることを、様々な利害関係者の合意を形成しつつ、粛々と行っていく必要があります。本書の中でも繰り返し主張されているように、その際に膨大な投資が必要となることが確実視されます。

研究データを公開することは、ネット上のどこかに単に研究データをアップすれば用が足りるというものではありません。研究データを誰に対しても可視化し、利用可能にするためには、そのデータを検索可能なものにする必要があります。研究データを生み出す研究者等は、特に情報学に精通している訳ではありません。そのため研究データにメタデータを付与することに、必ずしも長けていないことが想像されます。さらに、それを行うことに費やせる膨大な時間も持っていないでしょう。研究データを公開する仕組みの中では、研究データを検索可能にするためのメタデータの付与が必須となり、そのことを担う情報専門家（場合によっては、現在の大学図書館員が該当するかもしれません）の存在が不可欠です。研究データに対するメタデータ付与を、何らかの形で補佐する部署が大学の中で必要になるでしょう。大学図書館がその中で、どのような役割を担うことになるのか、今後の課題となることは間違いがありません。

本書は今後の大学図書館の方向性を示唆する上でも、有益な書籍と言えるでしょう。

(伊藤)

学術コミュニケーション入門：知っているようで知らない 128 の疑問

リック・アンダーソン著；宮入暢子訳

アドスリー，丸善出版 (発売), 2022.10

OPAC リンク：https://op.lib.kobe-u.ac.jp/opac/opac_link/bibid/2002313136



学術コミュニケーションとは、本書では「学術的・科学的な成果を生み出す著者や製作者が互いに、あるいは広く世間に対して情報を共有するためのさまざまな方法を総合的に言い表すもの」と説明しています。学術的・科学的な成果物の著者や製作者は多くが研究者ですし、成果物としての論文や学術書などの共有部分では出版社や図書館が果たす役割は大きいでしょう（もちろんブログや Twitter、メールなども学術コミュニケーションに含まれます）。成果物は職員や学生も利用しますから、大学に通う人のほとんどは学術コミュニケーションに何らかの関わりがあるとと言えます。

本書はその学術コミュニケーションの入門書として仕組みや背景を包括的に解説していますし、副題に 128 の疑問とあるように、細かい質問に分かれていますので、知識や興味に応じて必要部分を読みやすくもなっています。

原著者は米国のユタ大学マリOTT図書館に勤務し、学術出版協会や専門図書館の専門団体の代表も歴任しています。そのため解説は欧米の事情が中心となり、日本とは少し事情が異なる部分も見られますが、そこは章ごとにコラムが設けられ、訳者によって日本の事情が説明されていますので、安心して読むことができます。

また、各問題に対して研究者、出版社、図書館、読者の立場の違いによるそれぞれの事情に触れ、分野による学術コミュニケーションの違いにも配慮しており、原著者が中立的立場を意識して丁寧に解説しているのがうかがえます。

インターネットの出現は、これまで何世紀と行われてきた印刷物による学術コミュニケーションの世界を根底から揺るがすものとなりました。インターネットの普及により、学術出版や大学図書館において流通・保存方法に変化が起こっただけでなく、著者側・読者側がこれまで必須であった出版社や図書館という存在を介さずに自分で情報を発信・入手するという選択肢を持つこともできるようになりました。これにより、著者が出版社を介さず自分で論文をウェブ上で公開すれば、読者側はそれを直接ダウンロードするなどして読むことができるようになります。

それにもかかわらず、なぜ高い掲載料を支払ってまで著者は（電子または紙の）ジャーナルへの掲載を求めるのか。在庫や物流の必要がなくなったのに電子ジャーナルの購読料が高額になるのはなぜか。電子ジャーナル・電子ブックが増える中で図書館の役割はなんなのか。すべてがオープンアクセスであるべきか……。

研究者のキャリアの問題から、査読の仕組みや著作権にかかわることまで、これまでの学術コミュニケーションの歩みと、現在抱える問題、今後の動向を知るには有用な書籍です。

(中村)

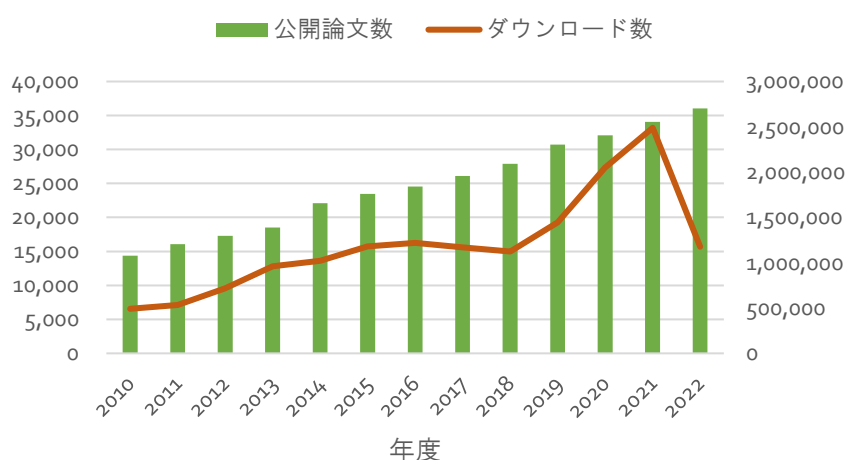
Kernel ニュース

附属図書館は2022年11月7日に、Springer Nature社とのパイロットプロジェクトを進めるための合意書に署名しました。本プロジェクトで締結した転換契約により、2023年1月から2025年12月までの3か年の間、Springer Nature社が刊行する特定のハイブリッドジャーナル（2,000誌以上）に論文を投稿する場合、年間79本までの論文が10万円/本の負担でオープンアクセス出版できるようになります。

本プロジェクトの詳細は、附属図書館 Web サイトをご参照ください。

https://lib.kobe-u.ac.jp/libraries/gakunai/oa_springer-nature/

Kernel 統計（公開論文数とダウンロード数の推移）



8月末に行った図書館システムの更新により、ダウンロード数の算出方法に変更がありました。そのため、ダウンロード数は減少して見えますが、一方で公開論文数は順調に増加しています。

（2022年度の数値は12月末時点のもの）

これからも研究成果が広く読まれるよう、公開に努めてまいります。今後も **Kernel** へのご登録、心よりお待ちしております。

Kernel 通信 第28号 2023年1月24日 発行

神戸大学附属図書館 電子図書館担当

特集 伊藤・中村（オープンアクセス推進WG）

インタビュー協力 平林・和田（オープンアクセス推進WG）・大場（図書館アウトリーチWG）

〒657-8501 神戸市灘区六甲台町2-1 社会科学系図書館3階

Email : repo@lib.kobe-u.ac.jp Tel : 078-803-7333 Fax : 078-803-7336